京都工芸繊維大学大学院 工芸科学研究科 造形科学専攻　博士学位論文　2014 年 9 月

日本統治期台湾の顕彰空間の形成に関する研究（要約）

松下 迪生

目　次

序　章

第１章　北白川宮能久親王の顕彰と台湾植民地社会
はじめに
１　日本統治期台湾における文化財保護の法的枠組み
２　北白川宮能久親王御遺跡所の成立
３　御遺跡所と植民地社会
おわりに

第２章　台南における北白川宮能久親王御遺跡所の空間形成
はじめに
１　御遺跡所の形成
２　御遺跡所と都市空間の変容
３　御遺跡所の都市的役割
おわりに

第３章　第五回内国勧業博覧会台湾館計画における建物移築の経緯
はじめに
１　台湾館実施案の概要
２　台湾館における移築建物について
おわりに

第４章　第五回内国勧業博覧会台湾館設置経緯と計画案の変遷
はじめに
１　第五回内国勧業博覧会と台湾総督府の参加
２　台湾館計画の変遷
３　設計主体とその意図
おわりに

結　章

図 1　明治 28 年台湾占領時の南進軍の行程と御遺跡所

図 2　台南御遺跡所（北白川宮能久親王御終焉之地）御寝殿

図 1・2 出典　台湾総督府内務局編『史蹟調査報告　第一輯　北白川宮能久親王御遺跡』（台湾総督府内務局、1935 年）

研究の背景と目的

本論文は、都市と建築が植民地統治に関わる局面の歴史的構造を、日本植民地および国内に形成された「顕彰空間」を対象として明らかにするものである。本論文が用いる「顕彰空間」とは、歴史的出来事や伝説、およびそれに関連する人物の顕彰のために設けられる視覚的表現およびそれを内包する空間を指している。19 世紀から 20 世紀初頭、日本の各地で遺跡の発掘や歴史的由緒の考証が活発におこなわれ、特定の場所やそれに関わる人物を、記念碑などの建立によって顕彰する動きが起こった。本論文が特に注目したのは、1895 年に台湾を支配地として掌握する際に命を落とした皇族北白川宮能久親王を顕彰するために、日本統治下の台湾や日本国内に設置された施設である。本論文では、植民地と国内の 2 つの場に注目し、その形成に関わる各主体間の意図を、台湾総督府の公文書（台湾・国史館台湾文献館所蔵『台湾総督府公文類纂』）や日本統治下の台湾で発行されていた新聞記事などを主な史料として解明することを試みた。以下、各章で考察した論点と概要を述べる。

第 1 章　北白川宮能久親王の顕彰と台湾植民地社会

本章では、日本統治期台湾で指定された史蹟のうち多くを占めていた、各地に設置された北白川宮能久親王御遺跡所を扱った。御遺跡所は、主に植民地統治下の台湾における地方機関が主体となって 1895 年の統治開始直後から設置が進められた。1933 年以降、日本統治下台湾の各地で御遺跡所の史蹟指定が進むのにともない、地元住民有志が御遺跡所の整備を進める例も見られるなど、その保護の主体は一律ではなかった。台湾神社が鎮座した首府台北にとどまらず、植民地台湾の地方都市においても、能久親王の事績の顕彰により、植民地統治の「正当性」が確認されていた。本章では、特に地方都市において、御遺跡祭典や招魂祭などの祝祭の場として、地域の植民地社会の統合を図るために郷土意識を喚起する役割を御遺跡所の空間が担っていたことを明らかにした。

第 2 章　台南における北白川宮能久親王御遺跡所の空間形成

本章では、1901 年に能久親王終焉の地、台南に設置された御遺跡所を取り上げた。御遺跡所の設置は、能久親王を祭神とする神社の誘致を目指す地元日本人の運動に端を発し、造営計画および土地収用が実施された過程を明らかにした。また台南御遺跡所は、収用された土地の半分を用いて造営され、残りの半分は 1923 年に台南神社の境内となるまで、貸下げや招魂碑の移設の問題などを通して、複数の主体の意図が関与する空間として変容したことも明らかにした。そこに関与する主体は、総督府、地方機関、台南在住の日本人有力者、神社宮司、駐留する軍関係者など、きわめて多様であった。御遺跡所の造営に際しては、台南在住の日本人名望家が台北への対抗意識を背景に設置誘致が行われたことが明らかになった。また、御遺跡所の隣接地への招魂碑移設問題に際して特に表れたように、中央の総督府と地方機関の対立において、台湾神社宮司が仲介的な役割を果たし、ときに地方機関の側に立って総督府と対峙する立場となった。以上の過程を経て形成されて行った顕彰空間が、台南における祝祭空間の中心としての意味を帯びていった内実を明らかにした。

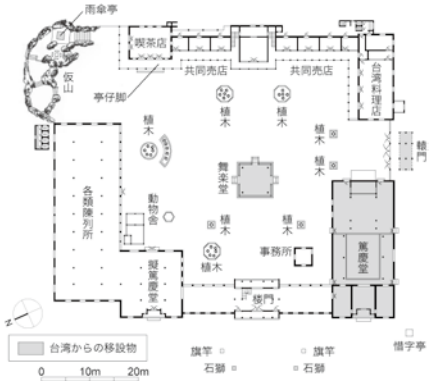

図3　第五回内国勧業博覧会台湾館平面図

図4　第五回内国勧業博覧会台湾館正面外観

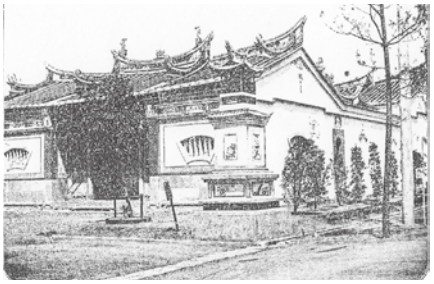

図5　第五回内国勧業博覧会台湾館 篤慶堂

図3～5出典　農商務省編『第五回内国勧業博覧会事務報告』（1903年）

第3章　第五回内国勧業博覧会台湾館計画における建物移築の経緯

本章では、1901年に完成した台南御遺跡所の造営と並行して進んでいた第五回内国勧業博覧会における台湾館計画に注目した。台湾館で参観者の目を惹いたのは、台南から移築された宗祠篤慶堂であった。博覧会場に置かれた篤慶堂は、台湾領有に際しての「戦利品」としての意味や、能久親王の悲劇とともに語られることによる顕彰の装置としての役割を担っていた反面、実際は台南での御遺跡所造営にともない除却された建物であったことを実証的に明らかにした。さらに一連の出来事には、御遺跡所の造営にも深く関わっていた台南在住の日本人有力者が関与した可能性を指摘し、植民地都市における空間の変容やそこから派生して出現する日本国内における顕彰空間の形成において、植民地における日本人有力者の影響力を考慮すべきであることを明らかにした。

第4章　第五回内国勧業博覧会台湾館設置経緯と計画案の変遷

本章では、1903年の第五回内国勧業博覧会における台湾館の計画案が、台湾総督府と本国農商務省の間のやりとりを通して形成されるにいたった経緯を明らかにした。「台湾風」とされる意匠を備える遊興的な空間的演出や、顕彰空間としての性格をもつことになる台湾からの建物の移築といった台湾館の特徴の背後には、建設費の問題をめぐる両機関のせめぎ合いに加え、「台湾風」意匠の採用を目指す台湾総督府土木部営繕課の意図が関与していたことを明らかにした。以上を通して、植民地統治の「正当性の物語」の創出に関わる日本国内における空間形成の背後に、植民地における統治機関の営繕組織による建築活動があったことを明確にできた。

結　語

明治維新前後の日本各地における史蹟の顕彰、とくに郷土における天皇の事績の顕彰といった状況は、近代日本に広く見られる文化イデオロギー構造であった。注目できるのは、国内で見られたこうした現象の萌芽が植民地統治の

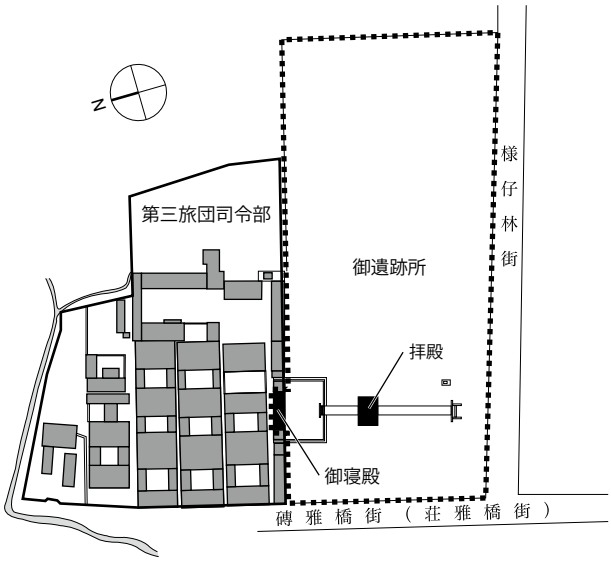

図6　台南御遺跡所および第三旅団司令部配置図（1901年頃）
『台湾総督府公文類纂』10944-1所収図面に基づき作成。

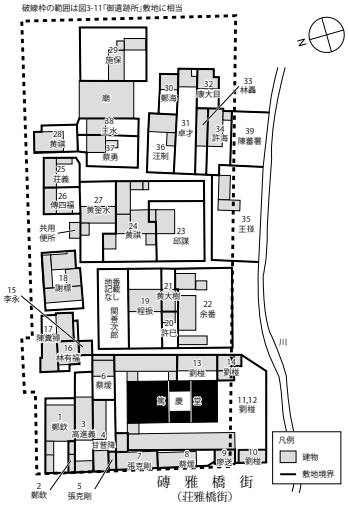

図7　台南御遺跡所境内整備前（1901年以前）の土地所有区分と建物配置
『台湾総督府公文類纂』625-17（明治34年）所収図面に基づき作成。

最初期からすでに見られたことである。能久親王を祭神とする台北に鎮座する台湾神社以外にも、能久親王が行軍した沿道の町にとって、個別に親王の「物語」は必要とされたのである。領台初期においては、在留する官軍民からなる日本人社会の統合の基盤として、またそれに加えて在来の台湾人社会に対して、「正当性の物語」が必要とされたのであろう。そのために共有できた材料が各地方における郷土意識であり、最も説得力があると考えられた「物語」となるのが能久親王の事績であった。

その最も説得力のある「物語」を最大に利用しようとした地方都市は、台南である。台南は、能久親王終焉の地を擁するという特殊性に都市のアイデンティティを求め、中央である台北に対峙した。植民地台湾における皇族能久親王の殉職は、植民地統治の歴史にとって最も顕著にイデオロギー性を帯びた題材であった。しかも、実際の没地とされる、この題材にもとづき形成される空間は、植民地の統治機関による権力の正当性を示す上で格好の装置となったとの推測は容易である。しかし、台南における一連の空間形成の過程の局面に注目すると、その変容は、突出した単一の主体による意思の発露としてではなく、むしろ拮抗する複数主体の関与の結果と捉えるべきであることがわかる。本論文で指摘したように、台南における御遺跡所に深く関わっていたのは、領台時に台湾に渡った日本人実業家であり、台南において有力者となっていく人物で、造営事業や土地の収用といった局面で顔を覗かせる。また、後に官幣中社台南神社へと発展するまでの時期における空間の変容において、日本人有力者に加えて注目されるのは台湾神社宮司という主体で、地方都市台南における在留日本人の声を吸い上げて総督府との調停役として立振舞う姿も垣間見える。このように、植民地における地方都市の日本人有力者や神社といった主体が、ときに総督府とは異なる意思を持つモノを言う主体となって、空間の形成に決定的な影響を及ぼしていたことを指摘しておきたい。

「顕彰空間」を通して見た植民地における空間形成の構造を考えるとき、植民地内における中央と地方の関係に加えて、植民地と本国との関係が介在していることに注意しなければならない。本論文第３・４章で考察したように、内国博覧会という場に出現した植民地パヴィリオン台湾館は、植民地統治機関である総督府の意向が直截に具現化したものではなく、本国農商務省とのせめぎ合いの結果として実現した空間であった。総督府やその営繕課の意図は、異質の建築文化を備える新領土の空間的表現に主眼がおかれ、能久親王の顕彰という「物語」は、設置主体の側に必ずしも当初から明確に意識されていたわけではない。しかし、台南における御遺跡所造営の結果として実現することになった篤慶堂の移築により、能久親王の「物語」は、本国に対するベクトルとしても作用することになった。ただし、本国へのベクトルは、植民地内における多様な動向を捨象しており、単一の台湾イメージの創出へとつながるものであった。こうした二面性を抱える必要に迫られたところに、植民地に関わる空間形成の特殊性が見えてくるのである。

以上のように、本論文は、顕彰空間という切り口から見た都市空間の形成と建築の出現を、複数の主体の拮抗する力関係との関連から把握することを試みた。とりわけ本論文は現実の空間そのものの変容に注目し、その局面ごとの解明という作業を、植民地統治を媒介とした都市空間や建築の出現を対象としておこない、植民地都市史における新たな枠組みを提示できたと考える。